



SAGE 質的研究キット
ウヴェ・フリック監修

8

質的研究の 「質」管理

ウヴェ・フリック
上淵寿 [訳]

質的研究の質をいかに評価するか。
高い質を確保するために、
どう研究を管理するか。

質的研究には、量的研究とは異なる評価基準が求められる。
質的研究の特質である多様性を管理し、研究を拡張する方法
としてのトライアンギュレーションを中心に、質的研究の
質を管理するにあたっての問題とその解決について丁寧に解説。
どのような質的研究にせよ参照すべき、枠組みを提供。

新曜社



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

8

質的研究の 「質」管理

ウヴェ・フリック
上淵寿 [訳]

新曜社

SAGE 質的研究キット 全8巻

1. 質的研究のデザイン	フリック, U./鈴木聡志 (訳)
2. 質的研究のための「インター・ビュー」	クヴァール, S./能智正博・徳田治子 (訳)
3. 質的研究のためのエスノグラフィーと観察	アングロシーノ, M./柴山真琴 (訳)
4. 質的研究のためのフォーカスグループ	バーバー, R./大橋靖史他 (訳)
5. 質的研究におけるビジュアルデータの使用	バンクス, M./石黒広昭 (監訳)
6. 質的データの分析	ギブズ, G. R./砂上史子・一柳智紀・一柳梢 (訳)
7. 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析	ラプリー, T./大橋靖史 (訳)
8. 質的研究の「質」管理	フリック, U./上淵寿 (訳)

MANAGING QUALITY IN QUALITATIVE RESEARCH

Uwe Flick

SAGE Qualitative Research Kit 8

Copyright © Uwe Flick 2007. All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.



編者から

ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は、全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地から研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネス研究、経営研究、認知科学等の質的研究の**実践者**たち。
- こうした分野で質的手法を使用する**大学教員**。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の**学部生と大学院生**。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の方法的視点と著者が述べるアプローチから取り組まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の一つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって——経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り組まれるかもしれない。
- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって——これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通するいくつかの特徴を挙げることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。

- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプローチが開発される。
- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（ウヴェ・フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図して

いる。この本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実際的な諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。

- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール）は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』（マイケル・アングロシーノ）は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題（サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題）が、より一般的な諸問題（倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性）の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』（ロザリン・バーバー）では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。
- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（マーカス・バンクス）は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている（インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて）。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実際的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的研究におけるデータ分析』（グラハム・R・ギブズ）では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実際的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用

に、注意が払われている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』（ティム・ラブリー）では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実際的な問題が考察される。

- 『質的研究の「質」管理』（ウヴェ・フリック）は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマの文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについて現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるといふ文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいたSAGE社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げてくれた。



本書について

ウヴェ・フリック

質的研究の質の問題をどう扱うかは、「SAGE 質的研究キット」の他の巻でもいろいろな箇所では取り上げている。しかし、これは、質的研究一般にとって答えを見つけて、解決する必要がある重要な問いである。他の巻の著者たちは、本書よりも、この問題をより一般的にと同時により具体的に検討している。つまり、それぞれの巻で取り上げている具体的なアプローチや方法について、その質や妥当性^{〔訳注〕}*の問題に携わっている。クヴァール (Kvale, 2007) は、インタビュー研究の妥当性や客観性*について有益な省察を行っている。アングロシーノ (Angrosino, 2007) は、観察とエスノグラフィーについて同様のことを行っている。バーバー (Barbour, 2007) は、フォーカスグループを取り上げている。これが、他の巻が本書よりもより具体的な理由である。

他方で本書は、「SAGE 質的研究キット」の他の巻よりも具体的である。というのは、質的研究の質の問題を管理する具体的な方略*を概観しようと試みているからである。この観点から、本書では問題全体を、研究プロセスにおける1つの具体的な方法や、1つの段階の（正しいあるいは熟慮した）使用に関わる問題に限定しないよう努めている。むしろこの本の着目点の1つは、質的研究の質の問題に取り組む出発点として、研究プロセス全体を取り上げていることである。そこで本書は、質の問題に取り組む方法の1つとして、質の管理*と研究プロセスの透明性*を取り上げる。2番目の着目点は、通常の研究プロセスの考え方を拡大することである。本書ではそのために、いくつかの提案を行う。多様性を管理する方略は、研究知見や期待されることに直接合致しな

〔訳注〕 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

い事例にまで研究を拡張することを目指している。トライアンギュレーション*の方略は、いくつかの点で研究を拡張する。すなわち、複数の理論的、あるいは個人的な視点を統合したり、複数の方法論的アプローチを使用することによって、研究を拡張するのである。

本書は、全般にわたって、複数の方法で質の問題に答えようとする。質の基準を使用する、あるいは（再）定式化することによって、そして質を促進し管理する方略を開発し適用*することによって。この意味で、本書は、SAGE 質的研究キットのなかで2つの機能をもっている。本書単独としては、質的研究の質を管理する場面における問題とその解決について、統合的に説明することである。キットの他の巻との関係においては、方法論のレベルで、他巻にとって1つのまとまりある枠組を提供することである。

目次

編者から (ウヴェ・フリック) —————	<i>i</i>
「SAGE 質的研究キット」の紹介	i
質的研究とは何か	ii
質的研究をどのように行うか	iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲	iv
本書について (ウヴェ・フリック) —————	<i>vii</i>
1 章 研究の質にどう取り組むか —————	<i>1</i>
なぜ質的研究の質が問題となるのか	1
内的必要と外的挑戦	2
質の問題を問う 4 つのレベル	3
問題——質的研究の質を評価する方法	6
質的研究の倫理と質	9
本書の構成	11
2 章 基準・規準・チェックリスト・ガイドライン —————	<i>15</i>
はじめに	15
質的研究とは何であり、何を指しているのか?	16
標準化されていない研究の「標準」	18
質的研究の問いに答える伝統的な規準か、あるいは新しい規準か?	19
伝統的な規準の再定式化	21
新しい、方法に適した規準	24
ガイドライン、チェックリスト、規準のカテゴリー	28
規準を定式化する第三の選択肢としての方略	33
3 章 多様性を管理する方略 —————	<i>35</i>
はじめに	35
理論的サンプリング	36
分析的帰納法	38

メンバーや聴衆の合意	42
結 論	45

4章 トライアングレーションの概念 49

質的研究の歴史におけるトライアングレーション	49
何がトライアングレーションで何がそうでないのか？	53
多元的トライアングレーション	55
議論の流れ	60
洗練された厳密性としてのトライアングレーション — デンジンの批判への応答	63
視点の体系的トライアングレーション	64
統合的トライアングレーション	67
問題の構築、知識の生産、結果の保証の間の トライアングレーション	68

5章 質的研究における方法論的トライアングレーション 71

方法内トライアングレーション — エピソードインタビューのケース	72
方法内トライアングレーションを用いた例	83
異なる質的研究方法のトライアングレーション	86
方法間トライアングレーションの例	87
質の促進の文脈での、質的研究における トライアングレーション法	95

6章 エスノグラフィーにおけるトライアングレーション 99

参与観察からエスノグラフィーへ	100
エスノグラフィーにおける暗黙的トライアングレーション — ハイブリッドな方法論	102
エスノグラフィーにおける明示的トライアングレーション — トライアングレーションの指針	104
エスノグラフィーにおけるトライアングレーションの一例	107
質的研究の質を管理する文脈での、 エスノグラフィーにおけるトライアングレーション	117

7章	質的研究と量的研究のトライアングレーション	121
	質的研究と量的研究を結びつけることの意義	122
	質的デザインと量的デザイン	124
	質的方法と量的方法を結びつける	129
	質的データと量的データを結びつける	131
	質的結果と量的結果を結びつける	133
	量的研究における質の評価の文脈での、質的研究と量的研究の トライアングレーション	134
	質的研究と量的研究のトライアングレーションの例	137
	質的研究の質を管理する文脈における、質的研究と量的研究の トライアングレーション	140
8章	質を管理するためにトライアングレーションをどう使うか	143
	—— 実践的問題 ——	
	アクセスの特別な問題	144
	デザインとサンプリング	145
	データの収集と解釈	149
	質的研究と量的研究を結びつけるレベル	151
	トライアングレーションを使う研究におけるコンピュータ	152
	トライアングレーションを用いた研究のプレゼンテーション	154
	研究プロセスにおけるトライアングレーションの位置	155
	トライアングレーションを用いた研究への質的基準	157
	結 論	158
9章	質、創造性、倫理——異なる問いの立て方	161
	介入としての研究	162
	倫理的健全性の前提としての研究の適切性	163
	倫理的適切性の前提としての研究の質	164
	質的研究における倫理的原則	166
	質的研究の倫理的ジレンマ	167
	質と妥当性の議論における倫理的次元	167
10章	質的研究の質を管理する——プロセスと透明性への注目	171
	方法とデザインの適用	172
	質的研究の品質管理	176

意思決定過程の結果としての質的研究の質	179
透明性、文書化、執筆	180

訳者あとがき 183

用語解説 185

文献 193

人名索引 203

事項索引 205

装幀 = 新曜社デザイン室

ボックスと図表リスト

ボックス

3.1	分析的帰納法のステップ	39
4.1	トライアングレーションの定義	54
5.1	エピソードインタビューのインタビューガイドの例	78
5.2	主観的理論の再構築のためのインタビューガイドからの抜粋	90

図

5.1	方法内トライアングレーション	72
5.2	エピソードインタビューにおける日常知識の領域	75
5.3	エピソードインタビューにおけるデータの種類	83
5.4	異なる質的研究方法のトライアングレーション	87
5.5	信頼の主観的理論からの抜粋	91
7.1	質的研究と量的研究を統合する研究デザイン	125
7.2	データ収集における質的研究と量的研究の結びつけ方の分類	131
8.1	質的研究と量的研究のトライアングレーションのレベル	152

表

4.1	体系的な視点のトライアングレーション	67
4.2	統合的トライアングレーション	68
7.1	混合研究法デザインを決定する決定行列	128
8.1	トライアングレーションを用いた研究における比較の次元	146
10.1	質的研究方法の適用	173
10.2	質的研究方法の選択のためのガイドとなるクエスチョン	173
10.3	研究段階と方法を省察するための経験則とキー・クエスチョン	174



1章 研究の質にどう取り組むか

なぜ質的研究の質が問題となるのか
内的必要と外的挑戦
質の問題を問う4つのレベル
問題——質的研究の質を評価する方法
質的研究の倫理と質
本書の構成



この章の目標

- 質的研究をさらに発展させて創造していくために、質の問題が重要であることを理解する。
- この問題に関わる側面やレベルについての全体像をつかむ。
- 以降の章の概要を把握し、この問題にどう取り組むかの見通しを得る。

なぜ質的研究の質が問題となるのか

質的研究が成熟段階を迎えた。教科書、学術誌、その他の刊行物が増大しており、複数の領域を通じて研究実践が拡大していることがこれを示している。おそらくこの発展と、それが求められていることを示すいまひとつの指標は、質的研究、そのプラン、方法、得られた結果をどう評価*するかという問題が、切実さを増していることである。研究者が単純に自分たちの方法を信じていた発展の段階、たとえば、グレイザーが言うように「グラウンデッド・セオリーを信じよう。それは有効であり、行い、使って、公刊すればよい！」(Glaser,

1998, p.254) という時代は終わったように思える。この(素朴とも言える)楽観主義の代わりに、質的研究の規準*、チェックリスト、標準、質、厳密性と評価に紙数を多く割いている、多数の論文をわれわれは目にしている。

質的研究の発展の初期段階とは対照的に、質的研究の質に関する問題は、もはや質的研究には科学的な質が欠けているという(外部の)主張から主に生じているのではない。むしろ、「どのように」視点をとるのか、自分たちがしていることをどう評価し査定するのか、積極的に自信をもったやり方で質的研究の質をどう主張すればいいのか、という問いが、ますます内部から高まっているのである。質的研究のプロセスで質の問題を管理するやり方は、全体として質的研究のさらなる発展にとってたいへん重要なテーマとなっている。今日、質的研究それ自体の受容は、やや弱いといったところだ(たとえば、量的研究と比べて)。しかし、1つひとつの研究での特定の手続きや結果の受容は(たとえば研究基金、出版といった理由で)真に問題となっている。こうして、質的研究の質に関する議論の対象は、もっぱらではないにしても、主に、基礎的、認識論的、哲学的レベルから、研究の具体的、実践的レベルに移っている。

内的必要と外的挑戦

とはいっても、質的研究の質に関する議論は、内的必要と外的挑戦の交差点に位置している。内的必要は、フィールドとしての質的研究の発展と増殖から生じている。さまざまな方法論的選択肢が増え、認識論的・概念的プログラムも増えている。質的研究は、もはや1つか2つの特定の方法だけで行われているのではない。むしろ、研究のしかたにおいて、背景も、意図も、方略も異なる研究プログラムがある。プログラムが異なってもそれらに共通する質的研究の特徴を同定できるが(Flick, 2006a, chap.2 & 6; Flick et al., 2004aなどを参照)、これらのプログラムは互いに競合していると見ることができる。こうして、単一の研究プログラム内で、質的研究の質の問題を扱うことができる。何が良いグラウンデッド・セオリー研究なのか(Gibbs, 2007 参照)? それと悪い例を区別するものは何か? またこうした問題を一般的な質的研究として、比較することで扱うこともできる。何が、特定のグラウンデッド・セオリー研究を、良い質的研究の例にするのか? 同じトピックについて、どうしてディスコー

ス分析よりも適切なのか (Rapley, 2007 参照)? どちらの場合も、質の問題は質的研究の内部から、質的研究実践の内部から生じた、内的な問題である。

これらの問題と関連する質的研究への外的挑戦は、いったん質的研究が他の研究アプローチと競合するようになると現れてくる。質的研究が伝統的に他の研究形態が支配的なフィールドに入ろうとするときである。たとえば、心理学で質的研究者がピア・レビューの学術誌に研究を発表したいと思ったとき、その雑誌が伝統的に実験志向の場合、その単一研究が十分良い事例となると主張することが必要となる、これはまさしく挑戦である。あるいは、たとえば医療社会学者が、質的方法を使った研究を医学雑誌に載せたい場合、他の領域同様に、医学雑誌では自然科学の思想が支配的であり、質の問題がいっそう重要となる。

競争の他のフィールドは、伝統的に実験的あるいは量的な研究者が支配的な領域での、研究資金の獲得である。ここでも、外部から質の問題が生じ、助成金交付申請が評価され、他の背景からの申請と比較され、あるいは、単純に大いに議論されたすえ拒否される。

そして最後に、教育とカリキュラム計画においても、質的研究が他のアプローチと資源をめぐって競合するフィールドになりつつある。心理学者や社会学者にとって、カリキュラムの質的研究の部分とは何だろうか? そして、量的あるいは実験的なアプローチとの関係はどのようなものだろうか?

これらすべてのフィールドにおいて、良い研究と悪い研究を区別する規準、方略、アプローチを示し、質的研究の質を高め保証する質的研究の能力を示すことは、外部への挑戦である。質的研究者が、この問題により良い解決を示すことができれば、それだけこれらのフィールドにおける競争相手に対して、確固とした地位を築けるだろう。本書で後に見るように、質的研究の質の問題は、技術的な問題ばかりではない。研究の結果の質や研究から得られる洞察（新しくわかったことは何か?）をも意味している。

質の問題を問う 4 つのレベル

これまで述べてきたことからすれば、(質的) 研究の質の問題は、4 つの異なるレベルで、4 つの異なる当事者の点から検討することができる。